



ベテラン技術者に聴く

## 海外下水道事業・諸事情

株式会社 帝国設計事務所／技術顧問 田中直人



### 1. はじめに

札幌市に36年間奉職（うち30年は下水道事業）し、現在主に北海道内の自治体を顧客として建設コンサルタントに従事しております、田中直人と申します。

この度の寄稿依頼にあたり、札幌市職員時代を通じて、やや異質の経験である海外派遣の機会を得ましたので、少々トピックを交えお伝えしようと思います。

### 2. 集団研修 {下水道維持管理コース}

発展途上国では急速な経済成長及び人口増に起因する水環境悪化に対する有効な手段の一つとして、下水管路・污水处理施設の整備が進展しています。このような下水道施設は適切に維持管理がなされることにより生活環境改善・水環境改善また雨水排除に大きな役割を果たすものの、発展途上国においては必ずしもそういった社会基盤整備に維持管理能力が追いついていない現状があり、広範な知識や技術、適切な判断力が要求される下水道事業従事者の育成が急務となっております。

集団研修（下水道維持管理コース）は、国際協力機構（JICA）が札幌市に受け入れを依頼し、国土交通省都市・地域整備局下水道部及び日本下水道事業団の協力のもとに、1992年度に開設し、2008年度までに46か国、延べ100名の研修員を受け入れました。

### 3. フォローアップ

札幌市の「下水道維持管理コースは」2007年度に5か年のフェーズが終わり、更新時期を迎えたことから、帰国研修員の取り組みの効果発現促進、並びにニーズの確認による本研修の内容改善を目的として、下記の通り調査団を派遣した。

#### 1) 派遣国

- ・スリランカ国（コロンボ市上下水道局、国家上下水道局）
- ・シリア国（住宅・建設省、ダマスカス上下水道公社）

#### 2) 調査期間

2008年1月8日～1月16日

### 3) 活動内容

- ・帰国研修員による研修内容適用状況報告
- ・帰国研修員及び所属先への聞き取り調査
- ・帰国研修員の職場・現場視察

### 4. スリランカ国

現地に到着すると真っ先に日本大使館にあいさつに行きました。後ほど邦人保護要請の意味合いもある、と伺いました。



写真－1 日本大使館にて一等書記官にあいさつ



写真－2 コロンボの処理場（オキシレーションディッチ）



写真-3 コロンボの処理場（最終沈殿池）

コロンボにて、日本のODAで建設された処理場を視察しました。オキシデーションディッチ法。設計は有名な水コン協会、施工は〇〇組との日本語表記が確認できました。時折利権が取り沙汰される我が国のODAですが、このような形で資金の一部が国内企業に還元していることがわかりますが、双方にとって悪いことではない、と思います。

放流渠下流に漁場があるのか、塩素滅菌ではなく紫外線を採用していました。スケールが付着するので、日本人なら何とかしてくれ、とせがまれましたが、「洗え」「磨け」「取り替える」くらいしか言えませんでした。



写真-4 汚泥脱水機（引き抜きなし・なんと未使用）



写真-5 スケールだらけの紫外線ランプ



写真-6 コロンボで結婚式に遭遇

余談となります。現況下の日本ではほぼあり得ませんが、スリランカのホテルで昼食を摂ったところ2回中2回結婚式に遭遇しました。花嫁巨大。祝福と拍手を送りながらも仰天する我々に、のちほど現地スタッフから「お嫁さんは、大きいほど喜ばれる」旨解説がありました。

## 5. シリア国

シリアはソ連～ロシアの支援を受けた、アサド大統領の独裁国家ということです。政府高官へのインタビューのため執務室に入ると、いずれも大統領の写真が壁に数点掛けられており、行政執行に対する無言のプレッシャーを感じました。

以前、中国IT企業CEOが来日し、帰国間際に「今回の日本訪問において残念なことが二つある」と述べ、そのうちひとつは「日本国内で開催されたミーティングにおいて、女性の参加者が極めて少数若しくは皆無ということだ。」といった内容でした。

この発言を得て思い出したことは、ダマスカスで通りを歩く女性の姿を多く見かけません。その代わり、男同士で手をつないで歩くカップル（でいいのか？）を複数目撃しました。これについても現地スタッフから「ただの仲良しで特に意味はない」旨教えていただきました。



写真-7 古都ダマスカス・ウマイヤドモスク





写真-8 たまたま管路工場の現場に遭遇  
ノーヘルの陽気な作業員さん



写真-10 レストランで水タバコ試飲  
怪しい薬物ではございません



写真-9 帰国研修員の報告



写真-11 ダマスカスのバザール  
アーケードの無数の穴は内戦の銃痕とか

ちなみに女性は「おうちにいる」とのことです。

ただし、日本語通訳は関西の大学に留学経験のある女性でした。現地の言葉を関西弁に訳すので、ちょっと苦笑しました。

余談過多ですが、当時地域の町内会長をしており、たまに市から携帯電話に連絡を受ける機会がありました。まさにシリア滞在中にそれがあり、現地時刻午前4時ころ叩き起こされて、「〇〇まちづくりセンターですが、お話よろしいでしょうか?」「いま、ダマスカスにいるので対応できませんけど」「何ですか、それ」のようなやり取りが数分ありました。知りませんでした。日本国内から海外の携帯に電話するとかけた相手は通常の国内料金を負担し、日本から現地への通信料は受けた側の負担になるということであり、帰国後べらぼうともいえる請求があって、ひどく落胆した覚えが残っています。

帰国研修員から、PPTを使って研修成果、活用、同僚との知見共有について報告がありました。

モスリム（イスラム教徒）というと、厳格な生活習慣を思い浮かべますが、日本に来た研修員の一部は二日酔

いで講義に遅れる、下手をすれば休む、といった具合で、様々な様です。

## 6. むすび

ダマスカスのバザールを歩いていると「ジャイカ、ジャイカ!」と声をかけられ、仕込みか、と勘違いしました。日本人は海外で良く中国人と思われがちですが、ダマスカスではJICAの貢献が有名であったようです。そのような親日・平和なシリアを後にして、イスラム過激派の台頭、内戦、大国の介入、難民の大量発生に至るまで、多くの年月を要しませんでした。

また最近スリランカではパンデミックによる観光客の減少、さらに原油と物価高騰による国際収支の悪化のため、国家破産宣言・デモ隊による大統領府占拠、大統領辞任が報じられています。

あるとき出会った人々と過ごした時間に思いをいたし、無事を願わずにはいられません。